

# 中国におけるマルクス主義社会学の受容と展開

——五・四運動 (1919年) 前後から社会学の回復 (1979年) まで——

星 明

## 〔抄 録〕

本稿は、中国の社会学界がマルクス主義社会学をどのように受容し、どのように展開させてきたかを、清末期、民国期、新中国成立後の百花斉放・百家争鳴期と反右派闘争期、そして社会学の中断期と回復期といった歴史区分ないしエポックと関連させて考察したものである。

民国期に、なんにんかの社会革命家、言論人、知識人らがマルクス主義を国家の変革、構築のための考え方と行動の基礎にするために取り入れたが、それにはマルクス主義社会学も一定の寄与をした。そしてマルクス主義社会学はブルジョア社会学に対して劣勢ながらももう一方の学派として流布した。しかし、新中国成立8年後の反右派闘争期 (1957) にはマルクス主義社会学も含めすべての社会学は1979年までタブーになった。その理由は、社会学は資本主義社会のブルジョア思想をもつ学問であると判断したからである。1979年3月の社会学の回復、復権、再建にあたって、史的唯物論と社会学との関係について、多くの社会学者の論争を経て、社会学界として一定の理論的結論をだし、社会学に携わることの恐れや社会学のタブー視を撤廃し、社会学の再建を加速させた。

この小論は、うえの内容を関連資料 (可能な限り一次資料) に基づいて論じたものである。

キーワード：マルクス主義社会学、史的唯物論、ブルジョア社会学、中国社会学史、反右派闘争

## は じ め に

かつて、韓明謨はその著『中国社会学史』(1987)の、「日本語版への序文」<sup>(1)</sup>のなかで、19世紀末から20世紀の70年代までは、中国の歴史のなかで社会の変化がもっともドラマスティ

ックで、もっとも複雑な時期であった。これは 1. 清朝の皇帝統治の崩壊、2. 辛亥革命による中華民国の樹立、3. 中国共産党による中華人民共和国の樹立、4. 建国後 30 年にわたる紆余曲折した過程であった。そして中国の社会学が誕生し、成長してから、廃止され、さらに再建、回復したという複雑な経過は、まさに中国社会の変遷を全体的に、生き生きと反映したものである、と述べている。

まさに、社会学はその時代の歴史的、社会的、思想的な情況の影響をまともに受けてきた。中国の社会学は誕生と成長からみるとブルジョア社会学がマルクス主義社会学より質、量ともに圧倒的に優位であった。中国の社会学の廃止はいずれの側の社会学も同じ運命であった。社会学と名の付くものは、すべてブルジョアの学問であり、批判された。社会学は史的唯物論に取って代えられ、社会学は存在の余地がなかった。スターリンの社会学批判がそのまま踏襲された。1956 年のスターリン批判後、旧ソ連や東欧各国では社会学が復活、発展しはじめたが、中国では党の百花斉放・百家争鳴を鼓舞する方針に呼応してだされた社会学の復活の提起は、ただちに反右派闘争によって社会主義制度と共産党の転覆を企む意図をもっていとされて、ことごとく批判され、提起者の多くは右派分子とされた。その後の、1966 年から 10 年にわたる文化大革命期の知識人への迫害は、民国期に社会学者であった人たちにとっても大きな受難の時期であった。中国の社会学者を代表する一人であった費孝通も「牛棚」<sup>(2)</sup>に住まわされたし、費の同僚の潘光旦のばあいは、「反動権威学者」とされ、肢体不自由の身（清華留美準備学校の運動会での走り高跳びで右足を骨折し、切断した）で老齢（68 歳）にもかかわらず炎天下で草取りをさせられ、危篤になった時も、病院の医者は潘とかかわることを恐れてだれもみってくれず、命を落とした<sup>(3)</sup>。潘光旦は 1978 年 12 月の共産党の 11 回 3 中全会で名誉を回復したが、反右と文革の時期に右派分子や反革命分子とされた人たちの名誉回復者はそれぞれ 55 万人、316 万 8000 人とされている<sup>(4)</sup>。

その一方で、新中国の成立後、ブルジョア社会学からマルクス主義社会学に立場を変えた社会学者もある。孫本文である。孫は旧中国の社会学界でもっとも多く著作をもち、そしてもっとも影響力をもった人物の一人あり、新中国成立後、これまでの自分の著作はなんの価値もないことを知り<sup>(5)</sup>、焼き捨てたという<sup>(6)</sup>。というのも、「超現実的な階級の観点」<sup>(7)</sup>、「純学問的な観点」<sup>(8)</sup>、「ブルジョア社会学」<sup>(9)</sup>、「反科学的で、反人民的」<sup>(10)</sup>、「極端な反動性」<sup>(11)</sup>であったからといい、自己批判を行なった。因みに、孫本文は百花斉放・百家争鳴期の社会学の復活の提起に参加していない<sup>(12)</sup>。

中国の改革・開放（経済改革・対外開放）政策の幕があがった。社会学も学問における改革・開放のあかしとして、回復が決定された。そのためには、過去 30 年近くにわたって社会学を否定し、タブーにしてきたことを総括することが不可欠であった。共産党政権は社会学を取り消した過ちを認めた。社会学者たちは研究所、大学の学部、学会の立ち上げ、後継者の養成などとともに、マルクス主義と社会学の関係、史的唯物論と社会学の関係を理論的に整理する

必要があった。本稿では、このような歴史をもつ中国の社会学のなかで、マルクス主義社会学の受容、伝播と展開、史的唯物論と社会学の関係を社会学者たちがどのようにみたかを論じたものである。

本稿では、タイトルにマルクス主義社会学というタームを使用した。ここでいうマルクス主義社会学とはマルクス主義の観点をもつ、すなわち弁証法的唯物論、史的唯物論および科学的社会主義を基礎的要素にもち、その史的唯物論を用いて、社会を一つの全体として経済的社会構成体として把握し、この社会は自然史的過程をもって発展するという一定の視点をもつ社会学であると暫定的に規定しておく。この規定はもとより広範囲で、かつ網羅的であるが、本稿ではマルクス主義社会学の存立根拠、マルクス主義社会学の対象論と方法論、マルクス主義と社会学との両立可能性や両者の基本的な区別などをそれ自体として論究することより、むしろマルクス主義社会学がマルクス主義の受容から伝播、展開の過程とほぼ同時進行するなかで中国の社会学界で具体的にどのような経過をたどり、どのような論議があったかに考察の主眼をおいているゆえの規定である。

## 1. 中国へのマルクス主義社会学の伝播

19世紀の末ごろから、中国の新聞や学界にマルクスの思想が紹介され、それをめぐって討論されはじめた。マルクスの名前が、中国にはじめてもたらされたのは、1899年4月、イギリス人宣教師ティモシー・リチャード (Timothy Richard, 李提摩太) 自らが創立した広学会が発行した『万国公報』(月刊)でかれ自身がマルクスを「馬客偲」と訳したのが最初である<sup>(13)</sup>。当時、前後してマルクス主義、社会主義の思想が中国の知識界にもたらされていた。それらには次のようなものがある。1. 梁啓超の「進化論者革命者頌徳 (ベンジャミン・キッド) の学説」(1902), 『中国之社会主義』(1903), 2. 朱執信の「ドイツ社会革命家小伝」(1905), 『共産党宣言』(抄訳) (1905), 3. 浙江省紹興の『新世界』に紹介された「理想社会主義と実行社会主義」(「社会主義の空想から科学への発展」) (1912) などである。

マルクス主義が中国に次第に浸透していったのは、辛亥革命 (1911) から五・四運動 (1919) の間、とりわけ1917年のロシアの十月革命以後のことである<sup>(14)</sup>。たとえば、李大釗の次のような多くの論考が、楊雅彬や韓明謨によって紹介されている<sup>(15)</sup>。「わたしのマルクス主義観」(1919), 「階級競争と互助」(1919), 「再論問題と主義」(1919), 「物質変動と道徳変動」(1919), 「経済のうえから中国近代思想変動の原因を解釈する」(1920), 「史観」(1920), 「マルクスの歴史哲学とリッケルトの歴史哲学」(1920), 「唯物史観の現代史学における価値」(1920), 「唯物史観の現代社会学における価値」(1920), 「社会主義と社会運動」(1920), 「ボルシェビキの勝利」(1918), 「庶民の勝利」(1918), 『共産党宣言』(抄訳), 『政治経済学批判序説』(抄訳), 『賃労働と資本』(翻訳), 「マルクスの歴史哲学」(1920) などが

あるが、韓明謨は「・・・マルクス主義は李大釗などの進歩的な人びとをとおして伝わり、中国共産党を誕生させるための、マルクス主義を中国での革命実践とするための、またマルクス主義社会学を中国に産みだすための、種まきの、そして芽をださせる役目を果たした」<sup>(16)</sup>といい、劉少傑は「李大釗、瞿秋白、李達らのマルクス主義社会学理論についての研究は、マルクス主義が中国に伝わってきた当初、中心的地位にあった」<sup>(17)</sup>という。

マルクス主義を本格的に中国に紹介し、伝播した人物として韓明謨、楊雅彬、鄭杭生・李迎生、余紅、李培林といった多くの人たちが李大釗をあげているが、陳樹徳はさらに「李大釗は革命者兼学者、教授として、学識が深くて広く、社会科学の各領域を涉猟した。『先生は中国の思想の継承者であり、中国の経済学、哲学、社会学の三つの方面の実質主義的な学者である。その経済学はマルクス主義哲学を議論の中心にして組み立てられている。その哲学もまたマルクス主義哲学を議論の中心にしている。その社会学は資本社会の理論、およびその理法のマルクス説を議論の中心にして組み立てられている。先生の学説は、すでに厳然とした中国社会主义の学問の古典になっている』<sup>(18)</sup>という。ここからわかるように、マルクス主義社会学は『中国社会主义の学』の一つの構成要素であり、李大釗の社会学思想はマルクス主義を伝播する重要な内容である」<sup>(19)</sup>と述べている。

戊戌変法（1898）、辛亥革命（1911）そして五・四運動といった直接にはブルジョア革命に思想的、理論的武器を提供したのは、主としてブルジョア思想であり、ブルジョア社会学であった。しかし、当時のマルクス主義、マルクス主義社会学もすでに中国の思想界に受け入れられ、次第に定着してきてきた。陳樹徳は「・・・20年代以後、マルクス主義社会学とブルジョア社会学は共存した局面があらわれた」<sup>(20)</sup>と述べている。また、かれ自身が行なった中国社会学の発展の四つの時代区分の第3期（1931～1949年、社会学の中国化の時期）では、「この時期の中国社会学の顕著な特徴は、大学および科学研究機構を拠点とするブルジョア社会学と中国共産党員が社会学の方面での理論と実践とが同時に迅速な発展を遂げたことである」<sup>(21)</sup>ともいっている。ここでいわれている、共産党員による1931～1949年のおもな研究成果とは1. 陳翰笙の *The present agrarian problem in China*（1933）、2. 李達の『社会学大綱』（1937）、3. 中国共産党中央委員会がだした「調査研究の決定について」に基づき実施された『米脂県楊家溝調査』（1941）および『綏徳、米脂土地問題初歩研究』（1941）などである。

陳樹徳は、「解放前の中国にもすでに社会学があった。基本的に西側の資本主義国家から輸入されたものであるが、同時に伝わった史的唯物論の学説と厳しく対立する地位にあった」<sup>(22)</sup>と指摘しているが、これはかつて趙承信が、解放前の中国の社会学には「文化学派」と「弁証論派」の二大潮流がある述べたことと同じことを指している<sup>(23)</sup>。趙承信はさらに、前者は正統で、主流であり、後者は影響が比較的大きいが正統ではないと述べて、初期の社会学のなかのマルクス主義学派の研究活動を「主義学説の範疇」に属するものであり、「科学的討論にあらず」<sup>(24)</sup>という。

中国はアヘン戦争を境に、世界政治の舞台に組み込まれた。それに対応するかたちで国内では戊戌変法、辛亥革命、新文化運動（五・四文化運動、五・四文化革命）（1916～1921）そして五・四運動が起こった。陳樹徳は、中国での社会学の受容、発展の脈略からみれば、戊戌変法と辛亥革命は中国で社会学が生存できる社会的条件を作りだしたし、西洋の民主・自由に憧れ、西洋の科学技術を追求し、それが一つの強大な社会思潮になったことが、中国での社会学の迅速な発展を促し、新文化運動はその基本理論は進化論にあるが、反封建主義、反儒教主義で、科学と民主主義を標榜していたし、これらが五・四運動の原動力、共産党結成の思想的基盤になった。そして、五・四運動はマルクス・レーニン主義の中国での伝播を加速させたし、新文化運動を新たな段階に押しあげ、社会主義思想運動とともにマルクス・レーニン主義は澎湃と湧きあがった思想的潮流になったという<sup>(25)</sup>。

中国におけるマルクス主義社会学の成立は、中国の社会学の発展段階のどこに位置づけられるか。韓明諱は、1891年から2000年までの中国社会学の発展の時代区分を次のように五つに区分している。

表1 中国社会学の発展の時代区分

第一段階	啓蒙期	1891年－1910年	持続20年
第二段階	揺籃期	1911年－1927年	持続17年
第三段階	成長期	1928年－1948年	持続21年
第四段階	停滞期	1949年－1978年	持続30年
第五段階	再建期	1979年－現在	

出典：韓明諱、2002、『20世紀百年学案・社会学卷』、陝西人民教育出版社、p.12。

うえの時代区分にしたがえば、ブルジョア階級の民主革命に活躍した康有為、梁啓超、譚嗣同、章太炎、嚴復らはほぼ第一段階の啓蒙期に属する。そして、戊戌変法、辛亥革命から五・四運動の間にマルクス主義が中国に広まっていった。とりわけ、ロシアの十月革命以後により一層広まった。このようなマルクス主義の受容のなかで、マルクス主義社会学の受容も思想界、学术界で並行して行なわれたのである。

うえの議論や事実からみれば、マルクス主義社会学はほぼ第二段階の揺籃期に成立したとい

表2 中国の社会学の歴史的転変

1900年前後	社会学の伝播 <sup>*1</sup>
1919年ごろ	マルクス主義社会学が伝播
1949年	社会学が批判されはじめる <sup>*2</sup>
1953年	社会学の教育と研究が完全に取消される <sup>*3</sup>
1957年	社会学の回復・復権が提起される <sup>*4</sup> 社会学がタブーになる
1979年～現在に至る	社会学が回復・再建される <sup>*5</sup>

\*1. H. スペンサーの進化論的 sociology。 \*2. sociology と称するものすべて批判される。 \*3. 研究機構と大学で sociology の教育・研究は 1979年3月まで、26年間中断。 \*4. 1956年5月に提出された中共中央の百花齊放、百家争鳴の方針に応じて sociology の回復を提起するも、57年6月8日にはじまった党の反右派闘争によって提起者は全員右派とされる。なお、党員である社会学者は sociology の回復を提起していない。 \*5. 旧社会の sociology ではなく、史的唯物論を理論的基礎、指導思想とする sociology。

うことができる。さらに、政治的圧力による社会学の転変をみたのが表 2 である。

## 2. 中国のマルクス主義社会学者

中国の社会学史を論ずる主要な研究者は、1910 年～1920 年代のマルクス主義社会学者として、概ね次の人物をあげている。楊雅彬は 1. 李大釗, 2. 瞿秋白, 3. 陳翰笙, 4. 李達, 5. 許徳珩, 6. 李劍華, 7. 李平心, 8. 馮和法をあげ<sup>(26)</sup>, 韓明謨は 1. 朱執信, 2. 李大釗, 3. 李達, 4. 許徳珩をあげ<sup>(27)</sup>, 余紅は 1. 李大釗, 2. 李達, 3. 許徳珩, 4. 瞿秋白, 5. 李劍華をあげ<sup>(28)</sup>, 鄭杭生・李迎生は 1. 李大釗, 2. 瞿秋白, 3. 李達, 4. 許徳珩, 5. 毛沢東, 6. 陳翰笙をあげ<sup>(29)</sup>, 閻明は 1. 瞿秋白, 2. 鄧初民, 3. 許徳珩, 4. 李達, 5. 毛沢東, 6. 張聞天, 7. 陳翰笙, 8. 鄧中夏をあげ<sup>(30)</sup>, 李培林は李大釗, 瞿秋白, 李達, 許徳珩, 陳翰笙をあげている<sup>(31)</sup>。理論的著作に重点をおいて人物名をあげている論者もあれば、さらに農村調査、労働者運動さらに社会問題に関する活動をした人物名を加えてあげている論者もあるが、理論面であげられている人物はほぼ共通している。

鄭杭生と李迎生はその共著『中国社会学史 新編』（2000）の第七章の「中国の初期の社会学のなかのマルクス主義学派」のなかで、次の表 3 のような章節構成をたてて、この学派の代表的人物として李大釗, 瞿秋白, 李達, 許徳珩, 毛沢東, 陳翰笙を位置づけている<sup>(32)</sup>（括弧内の人物名は星が挿入した）。

表 3 新中国成立以前のマルクス主義社会学の研究分野とその人物

第七章 中国の初期の社会学のなかのマルクス主義学派
第一節 マルクス主義学派の社会学基礎理論に関する研究 <sup>(33)</sup>
一、李大釗 二、瞿秋白 三、李達 四、許徳珩
第二節 マルクス主義学派の社会構造に関する討議 <sup>(34)</sup>
一、マルクス主義学派の社会構造に関する理論的討議（李大釗, 瞿秋白, 李達）
二、マルクス主義学派の社会構造に関する実証的分析（毛沢東）
第三節 マルクス主義学派が発展させた社会問題研究と社会調査
一、マルクス主義学派の旧中国の社会問題に対する研究（李大釗, 瞿秋白, 李達） <sup>(35)</sup>
二、マルクス主義学派が発展させた社会調査
（一）毛沢東を代表とする解放区の農村調査（毛沢東） <sup>(36)</sup>
（二）陳翰笙が主宰した国民党統治区の農村調査（陳翰笙） <sup>(37)</sup>

出典：鄭杭生・李迎生，2000，『中国社会学史新編』，高等教育出版社，pp.151～170。なお、表にするにあたって、表題は星が名付けた。

うえの章節構成から、マルクス主義社会学が理論的研究、実証的研究、社会調査、社会問題研究の全般にわたって行なわれていることがわかる。楊堃はかつて、中国社会学の発展を萌芽期、紹介期、建設期の三つに区分し、その建設期においては次の五つの学派に分けることができると述べた<sup>(38)</sup>。すなわち、アメリカ文化学派、マルクス主義派、フランスのデュルケム社会学派、アメリカのヒューマン・エコロジー学派、イギリスの機能人類学派である。そして、楊堃は「マルクス主義派は 1930 年ごろ、かなりの勢力を有しており、一種普遍的な思潮に近

かったが、これは社会学だけに限らなかった」<sup>(39)</sup>とも述べている。

李培林は、「20世紀前半の唯物史観社会学」のなかで「中国の社会学が最初に形成される過程で、史的唯物論社会学が生まれ、その代表人物は李大釗、瞿秋白、李達、許徳珩、陳翰笙らである。当時、この人たちの人生経歴および教育背景はさまざまであるが、革命に希望を寄せ、進歩を追求する志向は一致していた。中国の初期の史的唯物論社会学は、マルクス主義の史的唯物論と科学社会主義思想を主たる内容としており、かれらはいつも自らの社会学思想を『史的唯物論社会学』あるいは『現代社会学』と称した。現代社会学と称したのは、かれらが以前の社会学は『伝統社会学』、『旧社会学』そして『ブルジョア社会学』だと考えたからである」<sup>(40)</sup>と述べている。

李培林は、「中国の初期の社会学の発展のなかで、史的唯物論社会学は社会学の主流ではなかったが、主に北京と上海で流行した。北京では李大釗らによって北京大学を中心にして進められた伝播で、上海では瞿秋白が学部主任であった上海大学社会学部を中心に伝播が行なわれた」<sup>(41)</sup>という。当時の中国の社会学には「文化学派」と「弁証唯物派」の二つの流派があったと趙承信が述べていることをもって<sup>(42)</sup>、マルクス主義、史的唯物論に基づいた社会学の存在が強調されることが多々あるが、実際は文化学派、ブルジョア社会学が圧倒的に優位であった。そして、両学派は相互に交流することはなく、むしろ互いの批判ないし無視が実際であった。たとえば、孫本文は1935年の著『社会学原理』で社会学が社会主義と混同されている誤解を指摘し<sup>(43)</sup>、また1948年の著『当代中国社会学』の「凡例」のなかでは、「一、本書は純粋な社会学理論と応用の各部門を主として述べるものであって、およそ宣伝に関連する性質の作品はすべて加えない。二、本書はこれまですでに出版されたもので社会史関連の著作は、歴史部門に属し、社会学に属すべきでないと考えるので、論及していない。三、本書は、史的唯物論の著作は純粋の社会学に属さないと考えるので、この種の史観から書かれた書籍はすべて割愛する」<sup>(44)</sup>と述べているほどである。1979年に中国で社会学が回復した後、1980年に中国の大学で最初に社会学部が設置された上海の復旦大学分校（現在の上海大学社会学部）で社会学（史）を担当した陳樹徳と許妙発はその教材『中国社会学史資料選編－上冊，下冊－』（1986年、上海大学文学院、表紙に「校内使用」と記載がある）<sup>(45)</sup>のなかで、32名の社会学者の業績を取りあげている。すべてが清末期および民国期のもので、中国の解放前に発表された業績であるが、ブルジョア社会学もマルクス主義社会学も等しく取りあげられている。百花齊放・百家争鳴期に社会学の復活を主張した費孝通や呉景超も取りあげられているが、その時の論考は掲載されておらず<sup>(46)</sup>、別のものが掲載されている。

### 3. 中国における社会学と史的唯物論との関係

社会学の構成は、大きくブルジョア社会学とマルクス主義社会学の二つに区分することもで

きる。社会学と史的唯物論の関係の議論は、主としてマルクス主義側から、史的唯物論と社会学の両者の関係をどのようにみるかということであって、かつてブルジョア社会学は批判、否定の対象としてあるに過ぎなかったが、1956年のスターリン批判以降は、旧ソ連や東欧でも社会学が回復、再建され、西側の社会学理論、方法、技術などの受容が進んできていた。マルクス主義が資本主義社会に成立した社会学に対応するとき、受容するにせよ、批判するにせよ、否定するにせよ、その両者の関係を明らかにすることは必要なことであった。

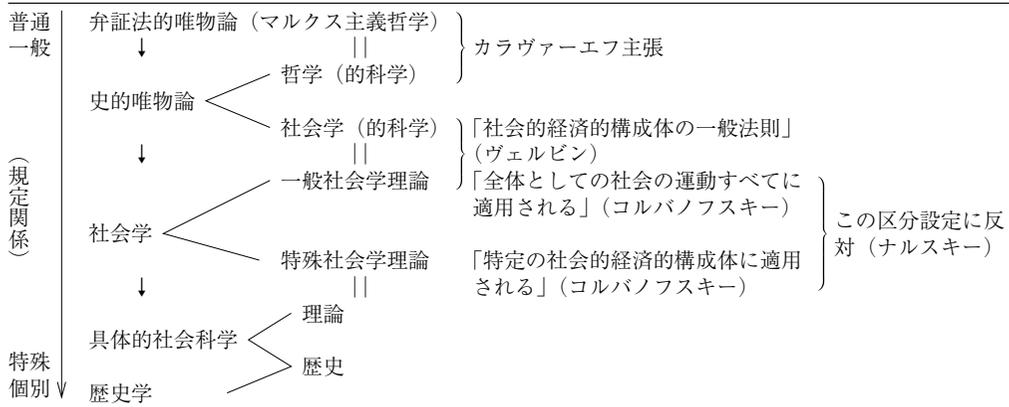
これまで、社会学と史的唯物論との関係についてさまざまな議論が展開されてきたが、まず日本の社会学者の議論を簡潔にみておきたい。そのうえで、中国の社会学界における両者の関係についてみることにする。

本田喜代治は、史的唯物論と社会学との関係について、「史的唯物論はあらゆる社会科学—たとえば経済学や法学等々の基礎原理であり、根本的な方法であるから、この関係は社会学にとっても同じである。おなじく家族や村落、婚姻や国家を扱っても、経済学や法学で扱うのと社会学で扱うのとはそれぞれ異り、そこに別の科学が成立しても少しも不思議ではない。社会学は、だから、史的唯物論という一般理論の上に基礎づけられ、そして現実の社会的事実—経済や法律とは一応べつな—によって具体化された一つの特種科学である。この意味において、それは史的唯物論とは同じものであって、しかも同時にそれとは異なる」<sup>(47)</sup>という。そして、本田は明確に、「わたしにとっては、史的唯物論は社会諸科学の認識方法であり基礎原理であって、経済学も法学も社会学も民族学その他も、すべて、これに導かれ、これに基礎づけられなければならないものなのである。したがって、誤解を招かないように、厳密に言うなら、じつは『一般社会学』という用語は避けたほうがよい。史的唯物論だけで沢山である。そして、社会学は、ただ、特殊社会学なのだ。それは一つの特種社会科学なのだから」<sup>(48)</sup>と述べている（傍点は本田）。つまり、社会学も経済学や法学や民族学などとならぶ特殊科学であり、史的唯物論はそれらの科学の基礎原理、根本的方法であるという。一般社会学という名称は不要だといひ、史的唯物論で充足するといひ、社会学はただ特殊社会学（部分社会学）であるとしている。

辻村明は、史的唯物論と社会学の関係について、次のように整理している<sup>(49)</sup>。すなわち、1. 弁証法的唯物論（哲学）と史的唯物論（社会への適用）とを区別しなければならず、後者がより特殊化されたものであることを前提しなければならない、2. 一般・特殊という軸のうえに、弁証法的唯物論→史的唯物論（一般社会学理論）→特殊社会学理論という三段階を明示しておく必要がある、3. 史的唯物論および社会学のなかがそれぞれ次の二つの分野に区別され、史的唯物論は哲学的要素（哲学的科学）と社会学的要素（社会学的科学）とを総合したものであり、その哲学的要素（弁証法的唯物論）によって、社会学的要素は理論的基礎づけを与えられる。そして、4. 社会学のなかの一般社会学理論は、すなわち史的唯物論（のなかの社会学的要素）であり、特殊社会学的理論はその史的唯物論によって理論的基礎づけを与えられ

ている、と述べている。辻村は旧ソ連、東欧の社会学者の史的唯物論、マルクス主義と社会学との関係の議論を整理し、次のように図示している。

図1 弁証法的唯物論、史的唯物論、社会学およびその他の社会科学の関係



出典：辻村明，1966，「史的唯物論とマルクス主義社会学」、『社会学評論』，vol.17, no.1, p.16。

河村望は、論文「戦後日本社会学とマルクス主義」のなかで、「第二次大戦の結果、日本帝国主義は崩壊し、わが国はアメリカ帝国主義の占領下におかれた。このなかで日本社会学が直面した問題は、一つは戦争責任と関係する社会学の存在意義の問題であり、もう一つは社会学が対象とする日本の社会の進むべき方向に関する問題であった」<sup>(50)</sup>と述べた後に、戦後、アメリカからの影響のもとで、社会学は実証主義の立場から具体的人間の社会的共同生活を扱うと規定され「・・・ここでは、具体的人間ということで、かえって階級的関係を捨象した抽象的人間の相互作用、共同生活が論じられるのである。ここでは、現象から本質という方向は否定され、かわ現象の分析を通して、社会の客観的矛盾を明らかにし、階級的立場において現実をとらえる方法は一方的に無視される」<sup>(51)</sup>と述べている。そのなかで、河村が批判した人物ないし理論は、アメリカ社会学の実証主義、福武直のマルクス主義観、T. パーソンズの世界体系論および構造・機能分析（この立場は全体を諸要素の相互依存、相互関連としてとらえ、相互の関係を矛盾・対立としてみず、対立物の統一として弁証法的にとらえないと河村はいう）、それを採り入れた富永健一の理論、日高六郎の調停主義的立場のマルクス主義理解、高橋徹・城戸浩太郎・綿貫譲治らの大衆社会論の背景にあるのは個人、集団、社会という先験的、観念的図式であり、階級、体制、革命といったマルクス主義の概念は常識的日常用語として、図式をかざりたる道具としての使用されていることなどを批判している、さらに「マルクス主義がドグマではなく、行動の指針であるとすれば、マルクス主義はプロレタリアートの革命的実践のなかで、階級闘争のなかで豊かになっていくのであり、この階級闘争における戦略戦術の問題を、『マルクス主義社会学』や『社会学的調査』にわいしょう化することは、マルクス主義者にとって断じて許すことのできないものである」<sup>(52)</sup>として、田中清助<sup>(53)</sup>や北川隆吉<sup>(54)</sup>がいう「マルクス

主義社会学」の可能性を批判している。

石川晃弘は、社会学と史的唯物論の関係について、社会主義国においては二つの流れがあるという。「すなわち、第一は、党路線を前提としながら問題設定を行ない、史的唯物論とマルクス主義社会学を同一視あるいは連続視しているものであり、それはソ連や東ドイツの社会学者の多くにみられる立場である。これにたいして第二は、マルクス主義社会学を史的唯物論から独立した科学としてうちたてる試みをみせ、また党路線から相対的に独自の立場から問題をたて、問題への接近を行ない、その成果を通して社会主義建設にかんする提言をしていこうというものである。これは、ポーランド、チェコスロバキア、ユーゴスラビアの社会学者のなかに多くみられる態度である」<sup>(55)</sup>と述べている。この二つの流れの第一は1956年のソ連共産党第20回大会でのフルシチョフのスターリン批判後に社会学が市民権を回復したことに基づくものであり、そして平和共存路線に基づく国際社会学会への参加に基づくものであり、また第二は当時のソ連からの政治的、イデオロギー的影響からの相対的な距離の遠近によるものである。

以上、日本の社会学者の社会学と史的唯物論の関係についての議論をみてきたので、次に中国の社会学者の議論をみてみよう。

鄭杭生は、史的唯物論とマルクス主義社会学の関係について、三つの観点があるという<sup>(56)</sup>。すなわち、1. 史的唯物論はマルクス主義社会学そのものであるとする観点、2. うへの観点とは逆に、史的唯物論はマルクス主義社会学のなかに含むべきであるという観点、3. 史的唯物論とマルクス主義社会学は違いがあるばかりでなく、また関係もあるという観点である。この3は一方では史的唯物論はマルクス主義社会学に取って代ることができなく、両者は異なるものであるとし、他方ではまた史的唯物論は社会学の理論的基礎および指導思想であることを強調し、両者は緊密に関連しあっているとする観点である。中国の社会学界では、1950～1970年代にわたって終始一貫してうへの1の観点が強勢であった。つまり、史的唯物論はマルクス主義社会学と同じものなので、史的唯物論は社会学に取って代ることができるので、社会学は不要だという考え方である。2の観点についてはユーゴスラビアの多くの学者がこの観点を主張しており、社会学を社会に関する一般科学としてとらえ、史的唯物論はただ歴史のロジックあるいは弁証法的唯物論の社会観および社会発展観にすぎないと考える。したがって、この考えの社会学の著作では、しばしば史的唯物論の原理を系統的に述べている。中国でも、なんにんかの学者はこの「枠組みの大きなものが社会学、小さなものが史的唯物論」と類似した見解をもっており、史的唯物論は哲学ではなく、具体的な科学であるので、史的唯物論は社会学に属すと考えている。この観点をもつ社会学者は、普通社会学は社会全体の基本構造および各部分間の相互関係を研究し、社会全体の発展法則を明らかにするものであり、それは「一般社会学」、「特殊社会学」そして「個別社会学」の三つの層があり、史的唯物論は「一般社会学」の層に属するものであり、史的唯物論の社会学に対する「指導論」は成立しないと

主張する(この2の観点はマルクス主義を国是とした新中国にとって、また史的唯物論をすべての社会科学の理論的基礎と指導思想とする中国にとって、認めることができないものである・・・星)。中国の社会学界は3の観点である。鄭杭生は史的唯物論と社会学の関係について、1. 研究対象からみると、史的唯物論は社会の発展の一般法則を研究するのに対し、社会学は社会運行と発展の特殊法則を研究する、2. 属する科学のヒエラルヒーからみると、史的唯物論は社会学をそのなかに含む各社会科学の知識の集約と全体的な結論であるのに対して、社会学はこのような高い集約のレベルはなく、社会学は史的唯物論の指導のもとにあり、自らの固有の観点から他の社会科学について集約をする。3. 機能からみると、史的唯物論は全体社会の普遍的意義をもつ世界観と方法論を考察するのに対して、社会学は自らの固有の観点に着目して、社会を研究する。鄭杭生は「史的唯物論とマルクス主義社会学は一般と特殊の関係なので、したがって理論的には両者は指導と被指導の関係がある。一方で社会学は必ず、社会的存在が社会意識を決定するという史的唯物論の基本的観点を指導としなければならないし、他方でまた社会学は各種の特殊な法則によって史的唯物論を豊かにしなければならないのである。多くの学者は、史的唯物論とは異なるが、しかし史的唯物論を指導とする、具体的な社会科学としてのマルクス主義社会学を確立しなければならないことについては、見解が一致している」<sup>(57)</sup>と述べている。

韓明謨は、史的唯物論と社会学の関係について、異なった観点と見解が生まれ、それが社会学の研究が長期にわたってタブーとされた大きな理由の一つとしたうえで、それらの四つの観点と見解をおおよそ次のように整理して述べている<sup>(58)</sup>。1. 史的唯物論は唯一の科学的な社会の歴史観であるということ、つまり史的唯物論が社会学の研究の科学的基礎であるということ、これを否定する観点。ブルジョア社会学の学者に多い観点である。2. 史的唯物論が社会学を科学のレベルに高めたのであって、史的唯物論があれば社会学は不要だとする立場。この社会学の史的唯物論への代替論は1957年以前のソ連のスターリン時代の論点であり、1957年の反右派闘争から1976年以前の文革終結までの論点である。3. ソ連の社会学者ロージン<sup>(59)</sup>らの主張である史的唯物論は一方で哲学的科学であり、他方で社会学である。つまり、史的唯物論の歴史観は哲学のおよび社会学的観点、範疇を含み、すべての社会科学の哲学的基礎であるという立場。4. 東ドイツの社会学者アスマンらが提出している、史的唯物論は一般社会学理論であり、社会学理論の最高の集約であるとする立場。韓明謨はうえのように四つの観点を批判的に検討したのちに、史的唯物論と社会学の関係は次のようにあるべきだと主張している<sup>(60)</sup>。第一に、史的唯物論は社会発展の一般法則の科学である。それは社会の一般法則の科学的歴史観を如実に反映しているとともに、社会を認識する科学的な方法論であり、また社会を改造する科学的な方法論である。科学的歴史観としても、あるいは科学的方法論としても、史的唯物論は社会学を含む各社会科学の研究の理論的基礎である。しかし、ここから史的唯物論が全体的に、あるいは部分的にそれぞれの社会科学の研究に取って代ることができると考え

ることはできない。史的唯物論の対象は社会科学の対象と同じではないし、また社会学の対象とも同じではない。史的唯物論があるからといって、社会学の問題が解決されるとはいえない。したがって、史的唯物論の研究と社会学の研究との間に、イコールを付けることはできない。第二に、社会学の研究に対する史的唯物論の指導作用を一方向的に偏って理解してもいけない。実際には史的唯物論と社会学は相互に促進しあうものである。史的唯物論は科学の哲学なのである。哲学は科学の発展に依存しなければならないし、自然科学と社会科学の発展に依存しなければならない、それによって哲学自身の発展を促進させるのである。

またさらに、韓明謨は、より新しい著書『20世紀百年学案・社会学卷』（2002）のなかで両者の関係について、次のように述べている。「史的唯物論と社会学の関係は中国社会学発展史上の古くからの問題のようであるが、永遠に新しい問題でもある。こういった問題は本当に徹底的に解決できていないともいえるので、この問題も社会学研究者が直面するもっとも重要な理論的問題である。最初に、史的唯物論が社会学に取って代るという考えのそもそものはじまり、および当面どのように両者の関係を科学的に扱うかを明らかにする。代替論が生まれた根源を考えるには、レーニンの『「人民の友」とはなにか、そして彼らはいかに社会民主主義者とたたかっているか？』の文章のなかで、マルクス主義の史的唯物論の基本原則を詳細に述べた時の話に遡る必要がある。・・・（中略）・・・。レーニンは『社会学における唯物論のこの思想は、すでにそれ自体で天才的な思想であった。・・・社会学をはじめて科学の水準に高めた。・・・をはじめて科学的社会学の可能性をつくりだした』と述べている。レーニンのこのことばは、後継者に多くの誤解をもたらしたし、また史的唯物論は社会学であるという見解があらわれた、この見解は旧ソ連時代でも、また旧中国時代でもマルクス主義理論のなかではいずれもこのようであった。これはまた中国で社会学が取り消されることに遭遇したもっとも主要な原因であった<sup>(61)</sup>。しかし、実際のところ、レーニンはこの論文のなかですでに『史的唯物論もまた、あらゆることを説明すると主張したことはかつてなく、ただ歴史を説明するための唯一の科学的な方法をしめすものであると主張したにすぎない』<sup>(62)</sup>と述べているのである。

そして、韓明謨は、中国の社会学界は社会学が回復した当初、なんども議論を経て、すでに次第に一方で旧ソ連、東欧のいくつかの国家および中国のなんにんかの学者の伝統的な「代替論」の思想の束縛から抜けでて、他方では弁証法的に、科学的に史的唯物論と社会学の関係の見解を解決したという。そして、その見解の主要な論点として次の三つあげている<sup>(63)</sup>。1. 社会学と史的唯物論は違いがある。史的唯物論は社会学に取って代ることができない。史的唯物論は哲学的歴史観であるのに対して、社会学は具体的な社会科学である。2. 社会学の研究は史的唯物論を指導としなければならない。史的唯物論は社会学の研究のために科学的世界観、方法論を提供する。3. 社会学の科学的成果は、史的唯物論の源泉の一つである。社会学は史的唯物論を豊かにし、発展させるために自らの貢献をすることができる。うへの提起のしかたは、中国の社会学者が中国人民の長年来の実験経験と中国の特徴に基づいて、自ら歩んできた

道路のなかで総括して得られた結論であり、それはマルクス主義の真義を体現しているばかりでなく、中国社会学を発展させるための道筋もはっきり示しているという<sup>(64)</sup>。

楊敏も社会学と史的唯物論の関係について、現在、中国の社会学界では大筋、次の三つの観点が堅持されていると述べている<sup>(65)</sup>。すなわち、1. 史的唯物論は社会学の理論的基礎である、2. 史的唯物論は社会学の指導思想である。3. 社会学の具体的研究およびその成果は、逆にまた史的唯物論を豊かにし、発展することを促進することができる、ということである。

また、1991年にはすでに徐小禾も「社会学が学問として回復した後、社会主義国家はいずれもマルクス主義社会学とはなにかという問題について、長期にわたって討論を繰り返した。その後、次第に多数のひとが受け入れることができる見解が形成された。すなわち、マルクス主義社会学は一つの独立した科学であり、史的唯物論が社会学の一般理論と方法論の基礎であるという見解である」<sup>(66)</sup>と述べている。

また、楊雅彬は「解放前のマルクス主義社会学の研究」のなかでマルクス主義社会学者として、前述したように李大釗ほか7名をあげ、そのなかの李達と許徳珩の著作を検討したのちに、「・・・、解放前のなんにんかの社会学者がマルクス主義を利用して社会学を研究した共通点は、史的唯物論を用いて中国社会の発展の方向は社会主義であることを明らかにし、ブルジョア社会学の各学派の唯心論的な観点を批判し、社会革命の必然性を論証し、社会学研究と社会革命を緊密に一つに結びつけた」<sup>(67)</sup>と述べている。

また、時憲民は「(-)史的唯物論は、社会科学の哲学的基礎および理論の出発点である。・・・(二)社会学研究は史的唯物論がもつ原理に対応する全面的な展開と進化である。・・・要するに、史的唯物論の理論は社会学を科学的基礎のうえに置く。これによって、人類が科学的に社会を認識することを可能にさせる。社会学は正確に現実の過程を描くことをとおして、史的唯物論を全面的に展開させ、深化させる。これによって、人類が科学的に社会を認識することを現実的に可能にさせる。これこそ、われわれの出すべき結論である」<sup>(68)</sup>と述べている。

以上から、わかるように中国の社会学界においては、社会学は、すなわちマルクス主義社会学であり、マルクス主義の歴史観であるとする史的唯物論は社会学と同一のものではないが、それは社会学の理論的基礎であり、かつ社会学を指導する思想であるという共通理解が存在することが明白である。

このような共通理解に至った長い道のりには、次のようなイデオロギーと学問の緊張があったことを忘れてはならないだろう。

陳樹徳は「1930～40年代、社会学というタイトルで、実際にはマルクス主義を宣伝する著作が非常に多かった。その主なものには、李達の『社会学大綱』、許徳珩の『社会学講話』、李平心の『現代社会学理論大綱』、姜君辰の『社会学入門』、馮和法の『社会学和社会問題』などがある。これらの著作の史的唯物論についての観点、形式、深さと広さはさまざまであるが、「救国」、「革命」のテーマにしたがい、現実目的性（イデオロギーと政治）は非常に明確であ

る。これらの著作は中国革命の勝利に対して貢献をしたし、ブルジョア社会学の唯心論の本質を批判することに対して役目を果たしたけれども、学術性と科学性は一定のダメージを受けた。社会学ばかりではなく、その他の社会科学もまた然りである。まさに李澤厚が『革命戦争中、当時のイデオロギーの重要性は科学をはるかに超えていた。そこでは科学は次第にイデオロギーの従順なしもべになったし、時にはイデオロギーの犠牲にさえなった』という如くである。社会学は社会科学のなかの重要な学科であるにもかかわらず、中国大陸で30年近くも中絶した。これは人びとが深く反省するに値する<sup>(69)</sup>と述べているが、まさにそのとおりである。

この30年近い社会学の中絶（社会学の批判、否定、取り消し、タブー）に関する論考には次のようなものがある。

劉少傑はいう「遺憾なことに、20世紀の30年代以後、マルクス主義社会学の概念は次第に忘れられてしまい、中国共産党の大部分の理論文献にさえも再びマルクス主義社会学ということばが使われなくなった。マルクス、エンゲルス、レーニンらの土台・上部構造論、生産力と生産関係の矛盾、社会の歴史発展変動についての豊富な思想はすべて史的唯物論の範疇内に総括された。・・・(中略)・・・史的唯物論で社会学を取り消すというやり方は、明らかにスターリン時代のソ連の左傾した政治と教条主義の影響を受けていた。ソ連の初期の共産党の指導者のブハーリンは、史的唯物論は、すなわちマルクス主義社会学だとする観点を述べたために、スターリンからマルクス主義を歪曲した修正主義者として非難された。スターリンが定めるマルクス主義の理論体系のなかには、社会学はないし、しかも社会学はブルジョア階級の反マルクス主義の学説だとされた。1949年新中国成立後、中国社会学は20年余り禁止される目にあった。西側の社会学理論が国内に入ることを封鎖されただけでなく、そのうえマルクス主義社会学理論もだれも恐れて提起しなかったので、マルクス主義社会学の研究も語られなくなってしまった<sup>(70)</sup>と。実際、モスクワ大学にあった社会学の講座は、1924年に閉鎖されている<sup>(71)</sup>。

また、徐小禾も「スターリンも毛沢東も社会主義社会の経済、階級および上部構造などの問題について探求し、マルクス主義社会学の対して一定の貢献をなした。しかし、かれらが社会主義国家のなかで社会学理論を否定し、社会学研究も中止させたことに対しては一定の責任を負っている<sup>(72)</sup>と踏み込んだ発言をしている。

張向東は「スターリンと毛沢東は社会主義建設の過程のなかでいずれも『左傾』の誤りを犯したことがある。二人は自国で、異なった時期に、相次いで誤って社会学の存在の合法的な権利を剥奪した。しかし、これは二人の社会主義に対する経験研究には差し支えがなかった。・・・(中略)・・・社会学の本国での合法的地位を取り消したスターリンと毛沢東もさまざまな領域で社会学の理論に対して卓越した貢献をなした。ここから社会学の概念を使用したか否かによって、マルクス主義社会学理論が存在するか否かを判断する基準とすることは科学的でな

いし、また説得力もない」<sup>(73)</sup>と述べ、両巨頭については社会学を否定したことより社会学に対する貢献に力点を置いている。

劉少傑は論文「マルクス主義社会学理論研究の歴史と機会」のなかで、マルクス主義社会学理論研究の貧弱さを次のように吐露している。「30年間の中国社会学のマルクス主義社会学理論の研究成果を総合してみると、一面では肯定すべき成績を収めたが、別の一面では中国社会学の他の分野が収めた成績と比べて、マルクス主義社会学理論の研究は非常に貧弱な段階にあることは疑いない。包み隠さずいえば、マルクス主義社会学理論の研究成果は、量の蓄積においても、研究の深度においても、いずれも知れたものであり、欧米の社会学のマルクス主義社会学理論の成果と比べてさえ非常に貧弱である。ここで考えるべき問題は、中国の社会学が迅速な発展を得て有利な形勢にあるにもかかわらず、なぜマルクス主義社会学理論の研究はこのようにひっそりしているのか、ということである」<sup>(74)</sup>と。

いうまでもなく、中国はマルクス主義社会学、とりわけ「中国の特色をもつ」マルクス主義社会学の確立をめざしているが、その社会学の現状に対するうえのような分析について、中国の社会学者は傾聴し、再度検討する必要があるのではなかろうか。

## お わ り に

うえに述べてきたことから、要点を以下にあげてこの小論のまとめとしたい。

1. 1949年以前、マルクス主義社会学はブルジョア社会学と併存して、教育・研究活動を行なった。しかし、ブルジョア社会学が大学、研究機関の数、学者数、学術団体などにおいて圧倒的に優勢であった。
2. 1949年以前、マルクス主義社会学はマルクス主義の受容、伝播、宣伝、展開にも、また中国共産党の結成、中華人民共和国の成立にも役割を果たした。
3. 1949年以前、マルクス主義社会学は一貫してブルジョア社会学の唯心論、ブルジョア思想、資本主義体制を擁護する性格を批判した。1949年以後、とりわけ1957年の反右派闘争期には社会学はマルクス主義陣営によって徹底的に批判された。
4. マルクス主義社会学もブルジョア社会学も、およそ社会学と名の付くものは1949年の新中国建国後次第に、そして1957年の反右派闘争後は完全に中断し、1979年まで学問上のタブーになった。
5. 1979年の社会学の回復以後、中国社会学界は社会学と史的唯物論との関係を次のように総括した。すなわち、1) 史的唯物論と社会学とは同一のものではなく、史的唯物論は社会学に取って代ることはできない。史的唯物論は哲学的歴史観であるのに対して、社会学は具体的な社会科学である。2) 社会学の研究は史的唯物論を指導としなければならない。史的唯物論は社会学の研究のために科学的世界観、方法論を提供する。3) 社会学の科学的成果

は、史的唯物論の源泉の一つである。社会学は史的唯物論を豊かにし、発展させるために自らの貢献をすることができる、ということである。

〔注〕

- (1) 韓明諱著・星明訳、1987（2005訳）、「日本語版への序文」『中国社会学史』、所収、行路社、p.1。
- (2) 「牛棚」とは文革期に批判の対象にされた幹部、知識人らが強制的に収容された施設で、かれらが牛鬼蛇神（妖怪変化を意味するが、文革期には打倒すべき旧地主や旧資本家、学界の権威者などを指した）と呼ばれたことからこの名が付いた。小島晋治は「費氏は1959年に右派のレットルを外されたが、それ以後は、インド、アフガニスタン、パキスタンとの国境画定問題とかかわる、関連地域の少数民族、地理についての英文資料を収集、翻訳して関係当局の参考に供する仕事に従事したにすぎない（8冊の『資料匯篇』を編纂したが未刊）。そして文化大革命期は再び激しい批判、攻撃にさらされ、「牛小屋」（臨時の監禁場所）住まい、幹部学校行きなど、多くの知識人が経験したものをすべて経験し、1972年に中央民族学院に復帰し、翻訳に従事した（小島晋治、1985、「費孝通氏の歩んだ道」、費孝通（Fei Xiaotong）著、1983、*Chinese village close-up* 小島晋治ほか訳（1985）、『中国農村の細密画：ある村の記録1936～82』、研文出版、pp.347。）
- (3) 励天予編著・星明訳、2013、「新思想の伝播者潘光旦のひとと学問－著名学者潘光旦の生誕100年を記念して－」『社会学部論集』、第56号、佛教大学社会学部、pp.131～145。この訳稿には、『潘光旦先生百年誕辰紀念文集』（潘光旦生誕100年記念文集、陳理ほか編著、2000、中央民族大学出版社）の励天予以外のものも一部を訳出した。そこには「反右派闘争および10年の災禍（文革）の時、潘光旦先生はきわめて不当な扱いを受けた。・・・もしこのような歴史がなければ、潘先生はもっと長生きでき、もっとよい状態であったろう」、「費孝通先生は潘とはひときわ友情が一途であった。潘が10年の災禍のなかで病を患い、そして前後して亡くなり、そのうえ4人の娘さんの誰も身近にいない状況のなかで、費先生は自らも公然と批判されており、非常に困難な境遇であったにもかかわらず、今までどおり危険をものともせず、潘の世話をした」など潘を慕う人、6名の文章を掲載しているので、参照されたし。
- (4) 武吉次郎、1999、名誉回復、岩波現代中国事典、岩波書店、pp.1207～1208。実際には、1978年4月5日に、「中共中央は、右派分子のレットルを全て剝がすことを決定。11月までにこの工作を全国各地で完了」（家近亮子編、2004、『増補版 中国近現代政治史年表－1800～2003年－』、晃洋書房、p.96）。
- (5) 孫本文は「私のすべての著作は、焼き捨てられるだけのものでしかないということを、私は理解するようになりました。したがって私は、あなた（Albert R. O'Hara、郝繼隆・・・星挿入）に送るべき何物ももっておりません。私はまた、以前にはカール・マルクスの著作を研究することを怠っていたということを学び、今では毎日それに多くの時間を費やしています。どうか二度と手紙をくださらないように」と（A. インケルス著、1964、辻村明訳（1967）、『社会学とは何か』、至誠堂、pp.204～205）。孫本文は Albert R. O'Hara と、かつて1947年～1948年に、当時の南京の国立中央大学で社会学の同僚であった（拙稿、2015、「著名社会学者孫本文の二つの社会学観の通底性について」『社会学部論集』、第61号、佛教大学社会学部、pp.3～4を参照されたし）。
- (6) 周曉虹主編・孫本文文集編輯会、2012、『孫本文文集の第1巻（社会学原理）』の扉ページの裏に周曉虹らは「1957年以後、孫本文先生は自分で保存していた1949年以前のすべての著作を焼き捨てたが、ただ一冊『社会学原理』だけは残した」と記している。
- (7) 孫本文、1951年8月12日、自伝、周曉虹主編・孫本文文集編輯会、2012、『孫本文文集（第10巻、1949年后専著、論文及其他）』、所収、社会科学文献出版社、pp.173～174。
- (8) 孫本文、1951年8月12日、同上、pp.173～174。

- (9) 孫本文, 1957, 「現代ブルジョア社会学理論の本質と内容について」, 上海市社会科学界, 『學術月刊』, 第 4 期, p.36。
- (10) 孫本文, 1963 年 8 月, (著書『社会学原理』の) 扉ページの裏に書かれている孫自筆の題辭, 周曉虹主編・孫本文文集編輯会, 2012, 『孫本文文集 (第 1 卷, 社会学原理)』, 社会科学文献出版社。
- (11) 孫本文, 1958, 「断固としてブルジョア社会学の復活に反対する」, 科学出版社編輯部, 『反对資産階級社会科学復讐 (中国科学院が召集した社会科学界の反右派闘争座談会發言集) (第一輯)』, 所収, 科学出版社, pp.174~180。
- (12) 反右派闘争で孫本文が右派分子にされなかった理由は, 民国期に国民政府教育部高等教育司長という要職についたことから, 新中国で政治に対して慎重な態度をとったことがあげられる (周曉虹, 2012, 孫本文と 20 世紀前半の中国社会学, 周曉虹主編・孫本文文集編輯会, 『孫本文文集 (第 1 卷, 社会学原理)』, pp.4~7)。また, 孫本文はその職にあった時, 上海暨南大学で弁証法的唯物論と史的唯物論を講じていた許徳珩が共産主義を宣伝していると告発したことによって, 暨南大学は許徳珩の職を解いたこともある (閻明, 2004, 『一門学科と一時代-中国の社会学』, 清華大学出版社, p.192)。しかし, 文革ではブルジョア反動學術権威とされ, 家財の没収や批判にあい, さらに 1969 年には 77 歳で大学分校の農場労働に送られた (韓明謨, 2005, 『中国社会学名家』, 天津人民出版社, pp.98~99)。
- (13) 韓明謨著・星明訳, 1987 (2005 訳), 前掲書, 行路社, p.64, p.68。
- (14) 韓明謨著・星明訳, 同上, p.71。鄭杭生・李迎生, 2000, 『中国社会学史新編』, 高等教育出版社, p.62。閻明, 2004, 前掲書, 清華大学出版社, p.190。
- (15) 楊雅彬, 2010, 『近代中国社会学 (増訂版) (上冊)』, 中国社会科学出版社, pp.83~84。韓明謨著・星明訳, 前掲書, pp.65~66。
- (16) 韓明謨著・星明訳, 同上, p.66。
- (17) 劉少傑, 2008, 「マルクス主義社会学理論研究」, 鄭杭生主編, 『中国社会学 30 年 (1978-2008)』, 中国社会科学出版社, p.35。
- (18) 「李大釗先生評伝」, 『近代二十家評伝』所収, 1987, 書目文献出版社, p.314。ただし, ここでは陳樹徳, 1989, 「中国社会学の歴史的再認識」『社会学研究』, 1989 年第 4 期, 中国社会科学院社会学研究所, pp.2~3 から再引用。
- (19) 陳樹徳, 同上, pp.2~3。
- (20) 陳樹徳, 同上, p.6。
- (21) 陳樹徳, 同上, p.6。因みに, 陳は中国の社会学の歴史的発展を第 1 期 1819-1991 年 (西洋社会学の伝播), 第 2 期 1912-1930 年 (社会哲学から社会実地研究への過渡期), 第 3 期 1931-1949 年 (社会学の中国化の時期), 第 4 期建国後から 1978 年まで (社会学の中断時期) の四つに区分している。
- (22) 陳樹徳, 1983, 「歴史唯物主義と社会学の歴史的考察-『ドイツ・イデオロギー』を読む」『社会科学』, 1983 年 3 期, 上海社会科学院, p.39。
- (23) 趙承信, 1948, 「中国社会学の二大学派」『益世報』所載, 「社会研究」専刊, 第 23 期 (1948 年 1 月 23 日)。ただし, ここでは鄭杭生・李迎生, 2000, 前掲書, p.151 から再引用。
- (24) 趙承信, 同上, ただし, ここでは鄭杭生・李迎生, 同上, p.151 から再引用。
- (25) 陳樹徳, 1989, 前掲論文, p.2。
- (26) 楊雅彬, 1987, 『中国社会学史』, 山東人民出版社, p.160。
- (27) 韓明謨著・星明訳, 前掲書, p.65, pp.143~147。
- (28) 余紅, 1999, 「早期唯物史観社会学」, 袁方主編, 北京市社会科学联合会・北京市社会学会組織編写, 『社会学百年』, 所収, 北京出版社, pp.46~53。
- (29) 鄭杭生・李迎生, 2000, 前掲書, pp.151~170。

- (30) 闞明, 2004, 前掲書, pp.190~197。
- (31) 李培林, 2009, 「20世紀前半の唯物史観社会学」『東岳論叢』, 第30巻第1期, 山東社会科学院, pp.5~11。
- (32) 鄭杭生・李迎生著, 2000, 前掲書, 高等教育出版社, pp.151~171。
- (33) ここでの李大釗の論考には「わたしのマルクス主義観」, 「唯物史観の現代社会学上の価値」, 「史学要論」, 「マルクスの歴史哲学とリッケルトの歴史哲学」, 「物質変動と道徳変動」, 「唯物史観の現代史学上の価値」が, 瞿秋白のそれには『現代社会学』(1924)が, 李達は『現代社会学』(1929)が, 許徳珩は『社会学講話』上巻(1936)がそれぞれあげられている。なお, 李大釗の論考はすべて『李大釗文集』下冊(1984, 人民出版社)に所収されている。
- (34) ここでの李大釗の論考には「わたしのマルクス主義観」が, 瞿秋白のそれには『社会科学概論』(1924)が, 李達は『現代社会学』(1929)が, 毛沢東は「中国社会各階級の分析」(1925), 「農村の階級をどのように分析するか」(1933), 「中国革命と中国共産党」(1939)がそれぞれあげられている。
- (35) 李大釗の論考には「労働問題の災いの原因(禍源)」, 「上海の幼・少年工問題」, 「土地と農民」, 「自殺論」が, 瞿秋白のそれには「自殺」, 「林徳楊君どうして自殺しなければならなかったの?」が, 李達は『現代社会学』のなかの「労働者問題」, 「女性(婦女)問題」, 「準無産者問題」がそれぞれあげられている。なお, 陳定閔は「李大釗はマルクス主義社会学理論の先駆者であるのみならず, マルクス主義の原理で重要な社会問題に対しても分析を行なった」(p.78)といい, 人口問題, 労働問題, 農民問題そして自殺問題をあげ, そして「李大釗が1922年に発表した『自殺論』は中国の社会学史上最初の自殺問題の著述である」(p.81), 「李大釗はマルクス主義の啓蒙者であり, 中国のマルクス主義社会学の理論研究のための道を開いたが, しかしまだマルクス主義社会学の理論体系は樹立していなかった」(p.81)という(陳定閔, 1989, 「李大釗社会学思想の真髄(発微)」, 『社会学研究』, 1989年1期, 中国社会科学院)。
- (36) ここでの毛沢東らの論考には「湖南農民運動考察報告」, 「井岡山土地法」, 「興国土地法」, 「興国調査」, 「長崗郷調査」, 「才溪郷調査」, 「調査研究に関する決定」, 「綏徳, 米脂土地問題初歩研究」, 「米脂県楊家溝調査」, 「農村調査〈序文とあとがき〉」などがあげられている。
- (37) ここでの陳翰笙の論考には『畝の差異』(1929), Chen, Hansheng, 1939, *Industrial capital and Chinese peasants: a study of the livelihood of Chinese tobacco cultivators* (『帝國主義工業資本と中国農民』), 『広東農村生産関係と生産力』(1934)があげられている。
- (38) 楊堃, 1997, 中国社会学發展史大綱, 社会学与民俗学, 所収, 四川民族出版社, pp.184~191。ただしここでは, 李培林, 2009, 20世紀前半の唯物史観社会学, 東岳論叢, 第30巻第1期, 山東社会科学院, p.7から再引用。なお, 楊堃は『社会学大綱』の第10章「中国社会学發展史大綱」のなかで「中国の社会学の運動史はおよそ三期に分けることができる。第一期は萌芽期(1840年~1918年), 第二期は創設期(1919年~1930年), 第三期は建設期(1931年~1942年)である」と述べている(韓明諱著・星明訳, 前掲書, pp.24~25に紹介と説明がなされているので, 参照されたし)。
- (39) 楊堃, 1997, 「中国社会学發展史大綱」『社会学与民俗学』, 所収, 四川民族出版社, pp.184~191。ただし, ここでは李培林, 2009, 同上, p.7から再引用。
- (40) 李培林, 2009, 同上, p.5。
- (41) 李培林, 同上, p.6。
- (42) 趙承信, 1948, 「中国社会学の二大学派」『益世報』所載, 「社会研究」専刊, 第23期(1948年1月23日)。ただし, ここでは鄭杭生・李迎生, 2000, 前掲書, p.151から再引用。
- (43) 孫本文, 1935, 『社会学原理』, 商務印書館, pp.632~632。周曉虹主編・孫本文文集編輯会, 2012, 『孫本文文集・第1巻(社会学原理)』, 社会科学出版社, pp.457~458。

- (44) 孫本文, 1948, 当代中国社会学の凡例, 勝利出版社。周曉虹主編・孫本文文集編輯会, 2012, 『孫本文文集・第3卷 (近代社会学発展史, 当代中国社会学)』, 社会科学文献出版社, p.152。
- (45) 陳樹徳・許妙発, 1986, 『中国社会学史資料選編-上冊, 下冊-(社会学專業教学用書)』, 上海大学文学院。
- (46) 非掲載のものは、費孝通の「社会学のために語る」(1957年2月20日付, 文匯報。星明訳, 1991, 「社会学のために語る」『仏法と教育の森 (久下陸先生頌寿記念)』, 所収, 非売品, pp.33~40), 吳景超の「社会学は、新中国でまだ地位があるか」(『新建設月刊』, 1957年1月号。星明訳, 1995, 『中国と台湾の社会学史』, 所収, 行路社, pp.106~108)である。なお、反右派闘争で右派分子の烙印をおされた社会学者は陳達, 吳景超, 費孝通, 潘光旦, 吳文藻, 李景漢, 趙承信らである(科学出版社編輯部, 『反对資産階級社会科学復讐 (第一輯, 第二輯) (中国科学院が召集した社会科学界の反右派闘争座談会発言集)』, 科学出版社)。
- (47) 本田喜代治, 1961, 「史的唯物論と社会学」『社会学評論』, vol.11, no.3-4, pp.145~146。
- (48) 本田喜代治, 1961, 同上, p.146。
- (49) 辻村明, 1966, 「史的唯物論とマルクス主義社会学」『社会学評論』, vol.17, no.1, pp.15~17。なお、この図にはタイトルはないので星が名付けた。
- (50) 河村望, 1966, 「戦後日本社会学とマルクス主義」『社会学評論』, vol.17, no.2, p.34。
- (51) 河村望, 1966, 同上, p.35。
- (52) 河村望, 1966, 同上, p.41。
- (53) 田中清助, 1967, 「マルクスにおける Assoziation の概念について」『社会学評論』, vol.18, no.3, pp.2~21 および 1975, 「一般-特殊-個別-マルクス主義社会学へのアプローチ」『社会学評論』, vol.25, no.4, pp.37~50。
- (54) 北川隆吉, 1965, 「社会学の方法」, 北川隆吉編, 『講座現代社会学 第1-社会学方法論-』, 所収, 青木書店, pp.11~32。  
北川は河村望と宇津栄祐のマルクス主義社会学を否定する観点とは異なり, 同書で「・・・ここにわれわれは, 史的唯物論, マルクス主義を前提として, 社会学への基本的な検討と挑戦をおこなおうと考える」(p.3), 「サン・シモンを媒介として二つに分解した片方の極, すなわちマルクスの方法に社会学の成立をもとめ, それをひきつぐことによって真の発展が約束されると考える」(p.14)とその立場を明らかにしている。一方, 河村望と宇津栄祐は社会学とマルクス主義との関係について, 「社会学が, 現実を変革するための理論としてのマルクス主義社会科学のなかに止揚されるという展望のもとに, 議論を展開していることである」と述べている(河村望・宇津栄祐著, 1971, 『現代社会学と社会的現実-ブルジョア社会学批判-』, 青木書店, p.327)
- (55) 石川晃弘, 1969, 『マルクス主義社会学』, 紀伊国屋書店(紀伊国屋新書), p.17。
- (56) 鄭杭生, 1991, 「マルクス主義社会学」, 中国大百科全書編輯委員会『社会学』編輯委員会, 『中国大百科全書・社会学』, 中国大百科全書出版社, p.183。
- (57) 鄭杭生, 同上, p.183。
- (58) 韓明謨著・星明訳, 前掲書, 行路社, pp.222~224。この整理は韓明謨の記述のままでなく, 部分的に星がまとめたものである。
- (59) 石川晃弘はロージンのいう弁証法的唯物論と史的唯物論とマルクス主義社会学の関係を次のようにまとめている。「マルクス・レーニン主義哲学とは弁証法的唯物論のことであり, それは, 自然, 社会, およびそれらの人間の認識への反映を扱う, 統一的な科学的世界観である。この弁証法的唯物論は史的唯物論と密接な関係を有し, 後者は哲学的科学として, 社会的意識と社会的存在の関係, 社会発展のもっとも一般的な法則と原動力の研究を担当する。ところで, 史的唯物論には右のような哲学的科学としての側面のほかに, それからは相対的自立した意義を有する社会学的科学としての側面がある。この両側面は史的唯物論として有機的に結合してひとつの全体をなしてはいる

けれども、両者の区別は必要である。というのは、実際問題として哲学的な問題解決と社会学的問題解決とは同一ではないからである」（石川晃弘，1969，前掲書，pp.119～120）。

- (60) 韓明謨著・星明訳，前掲書，pp.224～225。
- (61) 1979年に社会学が再建される時，当時の中国社会科学院副院長の胡喬木は次のように述べている。「社会学がどのように中国で迫害され，禁止されたのか，この経過はわたしには確かにはわからない。ここ一、二年少しは状況を聞いたが，はなはだ心もとない。要するに，社会学が一つの科学であることを否定し，しかも非常に乱暴な方法でこの科学の中国での発展，存在，伝授を禁止したことはまったく誤りである。どのような観点からみても誤りである。すなわち，科学的観点からいっても，政治的観点からいっても，このようなやり方，段取りをとることは社会主義の根本原則に反し，社会主義の政治科学原則に反し，社会主義の政治原則にも反している。社会学の発展，存在，伝授を禁止したことについては，政治上，完全に誤りである。・・・（中略）・・・史的唯物論は，われわれに大量で，長い社会生活，社会発展を研究する基本的観点，基本的方法，基本的理論を提供したが，史的唯物論それ自身に社会の各領域の現象について具体的に研究する科学に取って代ることをとりわけ意図していない」と（胡喬木，1979年3月19日，「附録一 胡喬木同志在社会学座談会上的講話」，韓明謨，2002，前掲書，pp.297～298）。
- (62) 韓明謨，2002，『20世紀百年学案・社会学卷』，陝西人民教育出版社，pp.184～186。なお，レーニンの著作の訳文についてはマルクス＝レーニン主義研究所レーニン全集刊行委員会のもを参照した（同委員会，1963，『レーニン全集・第1巻』，pp.132～139）。
- (63) 韓明謨，同上，p.186。
- (64) 韓明謨，同上，p.186。
- (65) 楊敏，2008，「中国社会学理論研究」，鄭杭生主編，『中国社会学30年（1978～2008）』，所収，中国社会科学出版社，pp.49～50。
- (66) 徐小禾，1991，「マルクス主義社会学思想史」，中国大百科全書編輯委員会『社会学』編輯委員会，前掲書，p.186。
- (67) 楊雅彬，1987，前掲書，pp.171～172。楊雅彬，2010，『近代中国社会学（増訂版）（上冊）』，中国社会科学出版社，p.400。
- (68) 時憲民，1986，「社会学の誕生と発展からみた史的唯物論と社会学の関係」，中国社会科学院社会学研究所・社会学研究編輯部編，『社会学紀程（1979-1985）』，中国展望出版社，pp.74～76。
- (69) 陳樹徳，1989，前掲論文，p.5。
- (70) 劉少傑，2008，「マルクス主義社会学理論研究」，鄭杭生主編，『中国社会学30年（1978-2008）』，中国社会科学出版社，p.36。
- (71) W. Z. Laqueur and G. Lichthem, 1956-57, 1958. p.158。ただし，ここでは辻村明，1966，「史的唯物論とマルクス主義社会学」『社会学評論』，vol.17, no.1, p.2から再引用。
- (72) 徐小禾，1991，前掲論文，p.186。
- (73) 張向東，1986，「マルクス主義社会学理論分析」『社会学研究』，4期，中国社会科学院社会学研究所，pp.108～109。
- (74) 劉少傑，2008，「マルクス主義社会学理論研究の歴史と機運」『江海学刊』，5期，江蘇省中国社会科学院，pp.126～127。このような事態に至った重要な要因として，劉少傑は，1. 中国社会学が再建される当初，「左」の教条主義のマルクス主義社会学に対する否定を徹底的に清算できなかったこと，2. 中国社会学が再建される当初，マルクス主義社会学理論研究のいくつかの問題を徹底的に深く掘りさげて片づけなかったこと，3. 実証主義社会学の観念がマルクス主義社会学理論に対する理解と受け入れを制限したことをあげている。
- (75) この年表の作成にあたっては次の資料を参照した。韓明謨，2002，「附録二 中国社会学史大事記」，前掲書，pp.309～320。韓明謨著・星明訳，前掲書，「附録 中国社会学史年譜」，pp.239～

249。

中国社会科学院社会学研究所編, 1979 年から 1995 年までの各社会学年鑑所収の年譜。

鄭杭生・李迎生, 1999, 「附録 中国社会学發展歷程大事記」, 『二十世紀中国的社会学』, 党建四讀物出版社, pp.351~380。鄭杭生・李迎生, 2000, 「附録一: 中国社会学史大事記」, 前掲書, pp.284~307。

- (76) 1979 年 3 月 20 日午前 10 時から正午まで, 北京の友誼賓館で, 日本側は福武直を含め 7 名と費孝通 (当時中央民族学院副院長), 吳沢霖 (中国社会科学院民族研究所) の二人が会談。ここで, 福武らは費と呉から中国で社会学が回復したこと, 中国社会学研究会が発足したこと, 費が会長になったこと, 中国社会科学院に社会学研究所が設立されることを知らされたという (福武直, 1979, 「中国の社会学とその復活」『社会学評論』, 第 30 卷第 2 号, pp.63~65 および福武直編, 1979, 『現代化中国の旅-社会学者訪中団報告-』, 東京大学出版会, pp.192~197)。

付録 中国社会学史年表<sup>(75)</sup> (マルクス主義社会学関連を中心に) (1905~1979)

- 1905 年 朱執信が『民報』に「ドイツ社会革命家小伝」を発表したなかに, マルクス, エンゲルスの『共産党宣言』を抄訳した。
- 1912 年 浙江の雑誌『新世界』がマルクス, エンゲルスの『社会主義 空想から科学への發展』を紹介する。
- 1919 年 李大釗が雑誌『新青年』の第六卷第 5, 6 号で, 「わたしのマルクス主義観」を発表して, マルクス主義の唯物史観, 政治経済学および科学的社会主義の基本的観点を系統的に紹介し, 唯物史観が社会学の基本的な法則の思想であるという初歩的な提起を行なった。
- 1919 年 胡適が『毎週評論』の第 31 号に「多研究些問題, 少談些主義」(問題を多く研究し, 主義を語るのは少なくせよ) を発表し, マルクス主義の中国での伝播に反対した。李大釗は同雑誌の第 35 号に「再論問題と主義」を発表し, 胡適の見解に反駁した。
- 1923 年 上海大学が社会学部を設置, 瞿秋白が学部長になる。教務長の鄧中夏と瞿秋白が制定した社会学部の教学大綱は明確にマルクス主義社会学の理論基礎, すなわち史的唯物論を指導とすることを指し示しており, 教学内容もまたコント系の西側の社会学と違いがあった。教員は主に共産党内の知識分子によって担当された。この大学は中国革命のための秦博古, 張琴秋, 楊尚昆, 陽翰笙などの党の指導者を養成した。1927 年の「四・一」政変後, 5 月に国民党によって閉鎖された。
- 1924 年 中国国民党中央農村部が, 広州で前後して 6 回, 農民運動講習班を設け, 多くの農民運動の人材を養成した。毛沢東, 周恩来などが前後して教えた。実際の革命闘争に育まれて, マルクス主義社会学の水準を高めた。
- 1926 年 名義上は中国国民党中央執行委員会農村部だが中国共産党の指導のもとで, 1926 年 1 月, 『中国農民』を創刊。創刊号には毛沢東の「中国農民の各階級の分析およびその革命に対する態度」が, 第 2 期には「中国社会各階級の分析」が掲載された。これはマルクス主義の観点から中国農村の階級状況を分析した最初の著作である。
- 1926 年 李達が『現代社会学』を出版。これはわが国でマルクス主義の観点で書かれたはじめての代表的意義をもつ社会学の著作である。
- 1927 年 毛沢東が湖南省の長沙, 醴陵, 湘潭, 衡山, 湘郷の 5 県で農民運動の状況について調査を行ない, 『湖南農民運動考察報告』を書いた。
- 1928 年 この年から 1936 年までの数年間相次いで, 中国の文化思想界は中国社会の性質, 中国社会史および中国農村社会の性質について三つの論争を巻き起こした。これらの論争は中国の社会学, とりわけマルクス主義社会学の成長にとって, 積極的な促進作用をなした。
- 1928 年 陳翰笙が中央研究院社会科学研究所の仕事を主宰した。かれは公開合法身分を利用して, 1929

年からマルクス主義の観点と方法を使って、江蘇、河北、広東などの農村で3回の比較的大規模な調査を行ない、1930年初期に終えた。そこで得た結論は中国共産党が指導する土地革命に確実に採り入れられた。

1930年 毛沢東が「反対本主義」を書く。

1930年 毛沢東が江西尋烏で比較的大規模な調査を行ない、「尋烏調査」報告を書いた。

1933年 陳翰笙が英文の *The present agrarian problem in China* (Shanghai: China Institute of Pacific Relations | 32 p.) を出版。これは陳がマルクス主義の観点で農村調査を行なった代表作である。

1937年 李達が『社会学大綱』を出版。この書は李達が上海や北京の各大学で行なった講義の資料からなっている。

1941年 8月1日、中国共産党中央員会は「調査研究に関する決定」を行ない、党中央および各解放区が調査研究機構を設立することを求めた。それによって、調査研究が高揚した。「米脂県楊家溝調査」および「綏徳、米脂土地問題初步研究」の二つはもっとも有名な調査報告である。

1950年 中華人民共和国国家教育部が設置した高等学校課程改革委員会が「高等学校文法学院各学部課程草案」を公布し、社会学部の教育目標は政府およびその他の関連部門が必要とする幹部および中等学校以上の教員を養成することと規定した。学部の課程の設置は相当大きな調整がなされ、必修科目には理論、民族、内務、労働の四つが設置された。別に、革命理論、社会発展史などがもっとも重要な科目になった。

1952年 教育部が総合大学に対して調整を進めた。調整の後、社会学部をもつ大学は中山大学と雲南大学の二つだけになった。

1953年 教育部は継続して大学、学部の調整を進め、中山大学と雲南大学の社会学部は他の大学の学部あるいは学科に合併された。これをもって、大学における社会学の教育研究は完全に停止してしまった。

1957年 毛沢東をリーダーとする中共中央が提唱する「百花齊放、百家争鳴」の方針の鼓舞のもとで、費孝通が『文匯報』のなかに「社会学について、語る」という文章を発表し、陳達、呉景超らも全国政協会議および北京や上海などの各地の大新聞に、社会学の回復、再建に関する意見を発表した。これらの意見は知識界に大きな反響を引き起こし、関連する主管部門の関心を引き、重視された。しかし、反右派運動の開始後、うへの意見は資本主義を復活する陰謀の一つとみなされて批判され、事件に巻き込まれて、右派のレッテルを貼られた社会学者は少なくない。この時から、社会学は学問上のタブーになった。

1979年3月15日～18日 全国哲学社会科学計画会議準備処が北京で社会学座談会を開催、60名余りが参加。当時の中国社会科学院院長胡喬木が党中央を代表して重要講話を行なった。粗暴な方法で社会学の存在、発展と伝播を禁止したことは間違っていたと述べた。会議では社会学の回復と再建を決定し、また中国社会学研究会の設立を決定した。50名の理事を選び、費孝通を会長に選び、実際に社会学の回復と再建の活動を進めた。

1979年3月17日～4月2日 日本の著名社会学者福武直<sup>(76)</sup>ら日本社会学会員25名からなる訪中団がくる。これは中国の社会学回復後、最初の中国と外国の社会学界の交流のはじまりである。以後、福武直は學術団体を組織していくどか中国を訪問したが、1989年7月2日に逝去された。

1979年3月30日 鄧小平が、中共中央が召集した理論工作討論会で「社会学などの学問を過去長年にわたって軽視してきた、いま早急に補習する必要がある」という重要講話を行なった。

1979年9月19日 上海市社会学会が成立。これは社会学の回復後に成立した省市クラスの最初の社会学会である。以後、その他の省市に社会学会が次々と設立され、「九・五」の初期にはすでに30余りに達した。

〔謝辞〕

この小論の執筆にあたり、北京では韓明謨教授（北京大学社会学部）、楊雅彬研究員（中国社会科学院社会学研究所）、王康教授（中国政法大学）から中国社会学史に関して、直接多くの指導をいただいた。また、袁方教授（北京大学）、陸学芸研究員（中国社会科学院社会学研究所）、景天魁研究員（同研究所）、羅紅光研究員（同研究所）から中国の社会学の現状について、上海では励天予教授（華東師範大学）、許妙発研究員（上海社会科学院社会学研究所）、陳峰研究員（同研究所）、陳樹德教授（上海大学）から中国社会学史に関して、直接多くの指導をいただいた。瀋国明研究員（上海社会科学界連合会）、田曉虹研究員（上海社会科学院社会学研究所）からはそれぞれ中国の法制度、社会科学および社会学について多くの教えをいただいた。また、台湾では蕭新煌教授（中央研究院社会学研究所）、香港では黄紹倫教授（香港大学）からそれぞれ台湾社会学の現状、中国大陸の社会学史の教えをいただいた。うえにあげた方々とは、翻訳の許可をいただくために手紙をやりとりした蕭教授を除きすべて面識がある。日本では塩原勉教授（大阪大学人間科学部）、張琢教授（愛知大学現代中国学部）、張萍教授（佛教大学社会学部）そして君塚大学教授（佛教大学社会学部）からは多くのお教えをいただいた（いずれも所属は当時）。とくに、君塚さんからは批評、質問、疑問をペーパーごといただいた。みなさんに、御礼を申し上げます。うえの方々に、すでに6人の方が鬼籍に入られた。敬祈冥福。

（ほし あきら 現代社会学科）  
2016年10月28日受理